

# エンカウンター (ENCOUNTER)

## 第 2 2 7 号

2021年3月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://agape.wig.jp/encounter/>

佐生健光『キリスト教と称名』より (12)

エレミヤ記・哀歌

エレミヤ書、哀歌、又それ以後の預言書にも「主の御名を呼ぶ」記事が散見される。特に、哀歌 3・55-58 は、詩篇第 130 篇を想起させる美文を以て記され、私たちの心を打つ。

哀歌

深い穴の底から

主よ、わたしは御名を呼びます。

耳を閉ざさず、この声を聞き

わたしを助け、救い出してください。

呼び求めるわたしに近づき、

恐れるなど言ってください。(哀歌 3・55-58)

## ヨエル書

ヨエル書は預言者ヨエルによって書かれた書であるが、ホセア書とアモス書の中に、ひっそりとおかれた小さな書である。書かれた時期も定かではないが、紀元前5世紀中葉という説がある。ヨエルという預言者も、何時頃の人物か明確でない。しかし、その予言は注目に値するものであり、新約聖書の信仰に引き継がれるものとなる。

内容は、いなごと干ばつの大きな被害による荒廃を目のあたりにして、亡ぶべき民に悔い改めを説き、悔い改めて神に帰れば、救われるであろうと説かれている。

その中に、「主の名を呼ぶ」と書かれているところが2箇所ある。

何という呻きを家畜はすることか。

牛の群れがさまよい、

羊の群れが苦しむのは

もはや、牧草がどこにもないからだ。

主よ、私はあなたを呼びます。

火が荒れ野の草地を焼き尽くし

炎が野の木をなめ尽くしたからです。(ヨエル書1・18, 19)

その後

わたしはすべての人にわが霊を注ぐ。

あなたたちの息子や娘は預言し

老人は夢を見、若者は幻を見る。

その日、わたしは

奴隷となっている男女にも我が霊を注ぐ。

天と地に、しるしを示す。

それは、血と火と煙の柱である。

主の日、大いなる恐るべき日が来る前に

太陽は闇に、月は血に変わる。

しかし、主の御名を呼ぶものは皆、救われる。

主が言われたように

シオンの山、エルサレムには逃げ場があり、

主が呼ばれる残りの者はそこにいる（ヨエル書 3・1-5）

第1章の「主への呼ばわり」は、荒廃を目の前にして、破滅から救われることを神に祈る、「呼ばわり」である。それに対し、神は預言者ヨエルを通して「今こそ、心からわたしに立ち帰れ」と民に悔い改めを促される。そして、主に立ち帰った民に、救いを約束されるのである。

その後第3章が、独立した章句のように挿入される。これは、今、目の前にある荒廃の後に来る本当の荒廃である。その日は、主の恐るべき日、すなわち、終わりの日、最後の審判である。しかし、その日、神はすべての人に霊を注ぎ、「主の御名を呼ぶものは一人残らず救う」と言われたのである。

我々は、ここで初めて、「恐るべき日」という言葉を聞く。そして、「救い」とは、その恐るべき日に生き残ることであると教えられる。また、救われるための方法として、「主の御名を呼ぶ」ことを教えられる。ヨエル書以外の書では、「主を呼ぶ」と「主の御名を呼ぶ」と二つの呼び方があったが、ここでは「主の御名を呼ぶ」一本槍となった。

称名という見地から言えば、この書が旧約聖書のハイライトであろう。

## ゼファニア書

後続のアモス書、ヨナ書、ミカ書、ハバクク書、ゼファニア書、ゼカリヤ書などにも、「主を呼ぶ」「主の御名を呼ぶ」記事があるが、ヨエル書で明らかにされた「称名」の真理の余韻が響き渡っているように思える。ゼファニア書の一節を最後に書き記すことにする。

その後、わたしは諸国の民に

清い唇を与える。

彼らは皆、主の名を唱え、

一つとなって主に仕える。

……

お前は、再びわが聖なる山で、

驕り高ぶることはない。

わたしはお前の中に

苦しめられ、卑しめられた民を残す。

彼らは主の名を避け所とする。(ゼファニア書 3・11-12)

## まとめ

旧約聖書における「称名」を瞥見してきたが、その要点を以下にまとめてみたい。

まず、人々が「主の御名」を呼び始めたのは、人類の始祖アダムの孫の時代であった。以外に早期であったと思わせる。

アブラハムの時代の「称名」は、祭事に称えられたことが多く、神に感謝しそのみ名を讃えるためのものであった。

モーセの時代となり、はじめて苦難より救われるために、神への「呼び求め」が始められる。はじめは、出エジプトのときのように、戦いという特定の苦難から救われるためのものであったが、やがて苦難の性格が広く一般化するようになる。すなわち、死、恐れ、病、など。また、初期の「称名」は、民族としての集団的な「称名」の性格が多くを占めていたが、次第に個人的な「称名」が増加していき、それは異邦人にも知られていくようになる。また、「称名」は、人が犯した罪を悔い改め、罪から救われるためにも称えられるようになる。個人が犯した罪の場合も、民俗的集団の場合もある。イスラエルの民は、何度となくエホバの神を去り、他の神に従うようになるが、エホバの怒りに触れた時、彼らは「主の名を呼び、」エホバに帰っていく。

ヨブ記、詩篇、イザヤ書には、我々の感銘を深める重要な記事がある。

ヨブ記では、苦難を通して神の思いは人の思いを超えること、人は不条理を超えて神の意志に従うべき「称名」を学ぶ。

詩篇では、苦難からの救いを願い、救われた感謝の「称名」が多数みられるが、神の前に全ての人は罪ある者とされ、「称名」のうちに贖い主の出現が待望される兆しが見られるようになる。

イザヤ書特に第 53 章において、贖い主の姿が現れてくるが、我々にはそれがイエス・キリストのお姿とオーバーラップして見えてくる。続く各章の主への呼び求めが、主イエス・キリストへの「称名」のように思える。また、ここで「称名」の永遠性が神から保証されているのは、注目に値する。

ヨエル書で「称名」の意義が明確になる。ここでは、「しゅをよぶ」のではなく、「主の御名を呼ぶ」となる。「主の御名を呼んで救われる」とは、直面した天変地異に生き残るばかりでなく、最後の審判を生き残ることだということが明確になった。そして、この預言が、新約聖書の世界に引き継がれることとなる。その後の預言書にも、「称名」の言葉が続き、このヨエル書の真理が余韻のように響いて、旧約聖書が終わる。

## 律法による義認と称名による義認

このようにして、旧約聖書の世界を振り返ってみると、「称名」による救いは、イスラエルの歴史の中に、確固とした歩みを残してきたことが分かる。しかし、イスラエルのバックボーンは、モーセの十戒を中心とする律法であったはず。彼らは律法を忠実に行うことによって義とされると、固く信じてきたのである。

そのことは、「称名によって救われる」という言葉の周辺には一言も見出すことはできない。律法による義認という流れのほかに、称名による義認という大きな流れがあることを我々は知るのである。とすれば、この二つの流れの関係はどうなのか、これは重要な問題である。しかし、このことは、新約聖書における「称名」を一瞥し、今少し論考を進めたのちに考察したい。

## 新約聖書における称名について

前項と同様に、新約聖書に記述されている「称名」の記事をたどることから始めよう。まず福音書を取り上げる。

「わたしに向かって、『主よ、主よ』というものが皆、天の国に入るわけではない。私の天の父の御心を行う者だけが入るのである。かの日には、大勢の者がわたしに、『主よ、主よ、私は御名によって預言し、御名によって悪霊を追い出し、御名によって奇跡をいろいろ行ったではありませんか』というであろう。その時、私はきっぱりこう言おう。あなたたちのことは全然知らない。不法を働くものども、わたしから離れ去れ。(マタイによる福音書 7・21-23)」

このイエスのお言葉によると、「称名」が一見、否定的に思えてくる。しかし、このお言葉をよく読むと、これは「称名」の目的をより明確にされたお言葉であることが分かる。

すなわち、主の御名によって、預言したり、悪霊を追い出したり、奇跡を行っても、それは天の国に入る資格にはならない。天の国に入る資格は、天にいます父なる神の御心を行う者だけである。と、イエスは言い給う。

## 父の御心

それでは、神の御心を行うこととは何か。

私が天から降ってきたのは、自分の意志を行うためではなく、私をお遣わしになった方の御心を行なうためである。私をお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えて下さった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。わたしの父の御心は、子を見て信じるものが皆永遠の生命を得ることであり、私がその人を終わりの日に復活させることである。(ヨハネによる福音書 6・38－40)

私たちに与えられる資格とは、イエスを信じる者となることであり、永遠の命を得ることであり、終わりの日に復活する者となることである。一言で言えば救われることである。そのために「称名」する者は、天の国に入る資格が与えられる、と言うのである。称名の目的はその一点に絞られる。

現世で、人に称賛されるようなことは、天の国に招かれる資格にはならないことを、世のクリスチャンはよくよく銘記すべきであろう。

ルカ伝 6・46 で、イエスは「私を「主よ、主よ」と呼びながら、なぜわたしの言うことを行なわないのか」と弟子たちをたしなめておられる。このお言葉によると、当時は見当違いの「称名」をする人が、いかに多かったかが分かる。

## あなたは今日一緒に楽園にいる

次に、逆の例を挙げてみよう。

十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシヤではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」すると、もうひとりの方がたしなめた。「お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は、自分のやったことことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は、何も悪いことをしていない。」そして、「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出して下さい」と言った。するとイエスは、「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。(ルカによる福音書 23・39-43)

楽園とは、天の国のことである。この犯罪人は、何によってそこに招かれることになったのか。十字架の刑に処せられる犯罪者は、もちろん律法の違反者であり、この人物は罪人に他ならない。だから、彼は処罰されたのであり、彼は自分が罪人であることは、十分に理解していたのである。そして、「イエスよ……」と御名を呼んだ。それによって、律法では罪びととして処刑される身にもかかわらず、主イエス・キリストによって救われたのである。ここに、イザヤの預言が、実現したのである。

## エリコの町の譬え

律法では罪人とされ、そのことを自覚した者が、御名を読んで救われた例が他にも記されている。次の章句はその1例である。

一行がエリコの町を出ると、大勢の群衆がイエスに従った。そのとき、二人の盲人が道端に座っていたが、イエスがお通りと聞いて、「主よダビデの子よ、わたしを憐れんで下さい、」と叫んだ。群衆はしかりつけて黙らせようとしたが、二人はますます「主よ、ダビデの子よ、私たちを憐れんで下さい」と叫んだ。イエスは立ち止まり、二人を呼んで「何をしてほしいのか」といわれた。二人は「主よ、目を開けていただきたいのです」と言った。イエスが深く憐れんで、その目に触れられると、盲人たちはすぐに見えるようになり、イエスに従った。(マタイによる福音書 20・29－34)

当時、癒しがたい病人や身障者は、その人の犯した罪の結果とされていた。その人たちが、イエスの御名を呼んで、イエスに癒されたという事実は、罪許されたことを意味する。それゆえに、あくまでも律法による義を主張する学者、パリサイ人に対して、イエスは言われる。

「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく、病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」(マルコによる福音書 2・17)

## 律法の行いという流れと福音という新たな流れ

旧約聖書の時代から始まった主の御名を称えるという流れは、新約聖書の時代に入ってもせき止められることはなかった。ただ、引き続き使われた「主」という言葉の意味が、エホバの神からイエス・キリストに引き継がれたことは、大きな変化であった。今一つの流れ、すなわち律法の行いという流れは、福音書の時代には相変わらず存続していたが、福音という新たな流れの誕生により、せき止められようとしていた。この時代は、二つの流れのせめぎあいが始まった時であろう。